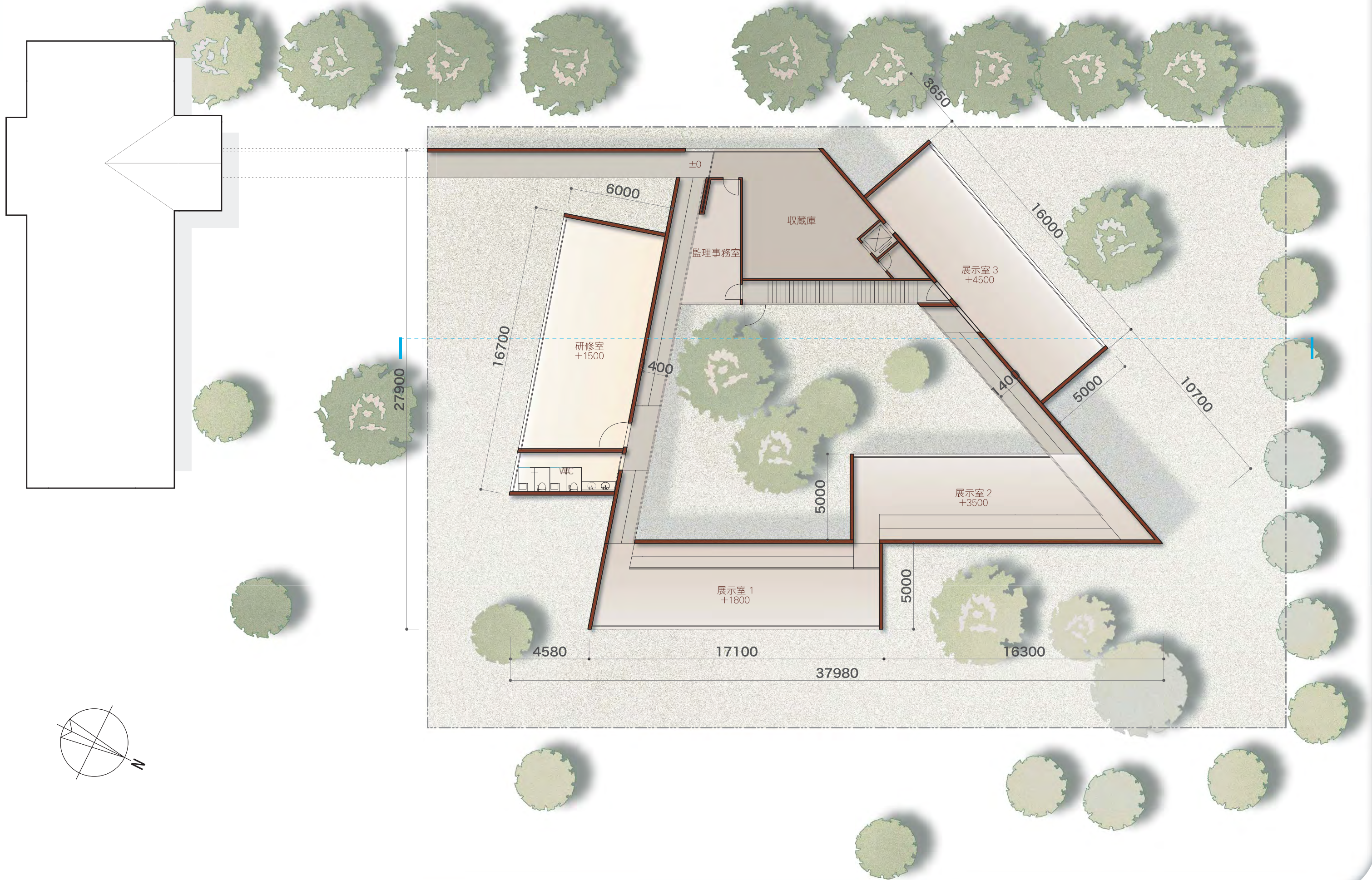
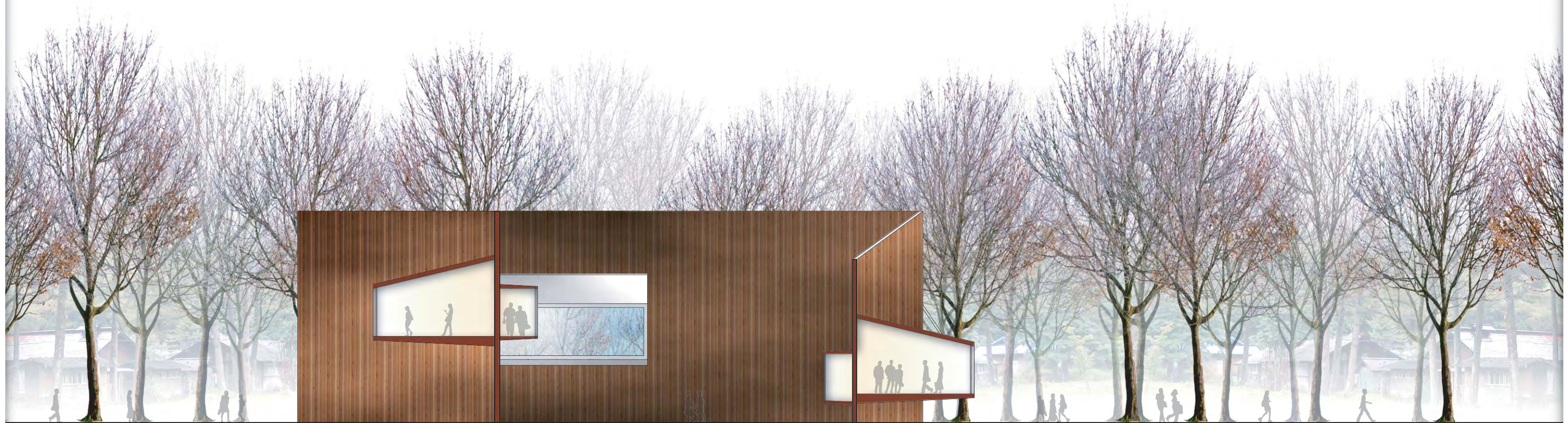


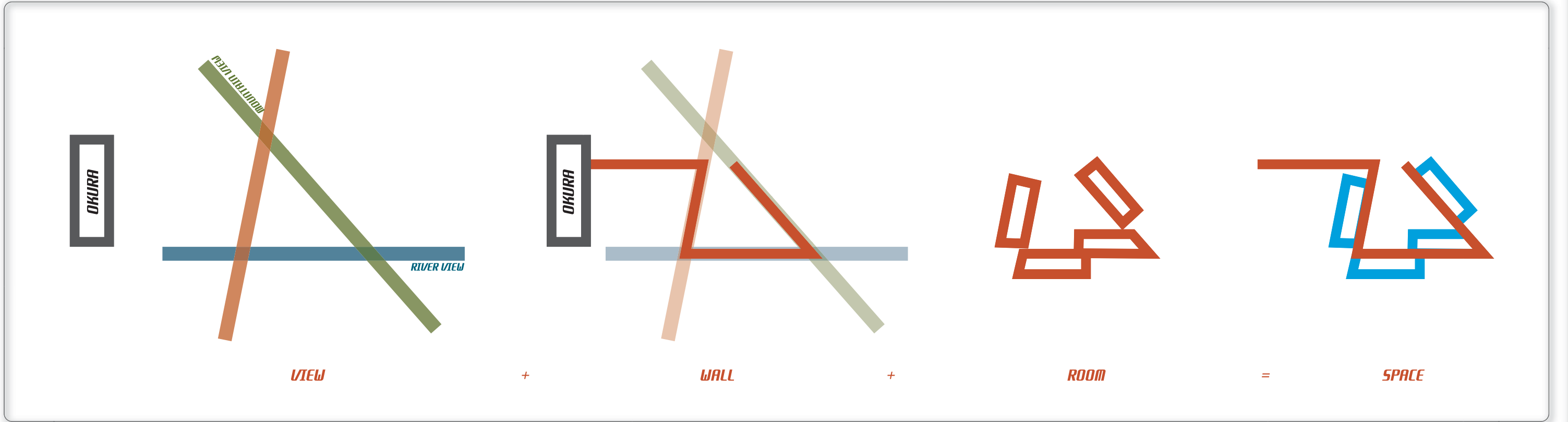
MUSEUM OF PHOTOGRAPHY

三年次デザイン研修 太田英和











本敷地には三つの VIEW が見て取れる（それは軸といてもいい）。1 つは敷地西側を流れる大井川への軸、1 つは敷地の北から北西にかけての荒川岳、赤石岳の山への軸、最後の 1 つは計画エリア南側の建築群への軸がある。本計画はそれらの軸に対して敢えて壁を立てる計画をとっている。それは、壁をたてることでその壁に対面する VIEW に対して、人々の意識がよりそちらに向かうことを意図している。軸方向以外の風景を切り取ることで、残された風景はより重要性を増すことになる。三つの軸に対してたてられた壁は大倉喜八郎記念館から延びる軸と繋がり 1 つの連続した壁となる。そして、要求される諸室を、その壁に沿って入れ子のように配置していく。壁を挟んで入れ子に配置された諸室の動線も同じように壁の両側を行ったり来たりする、入れ子の動線となる。壁によって切り取られた風景と、その壁を越えた時に見える風景は、川端康成の「雪国」にみられるような、「長いトンネルを抜けると雪国だった」のような「向こう側にある風景」を演出する。これはもちろん「長いトンネル」ではなく「薄い壁」なのだが、逆に薄いがゆえに、こちら側とあちら側の境界の強さがあるのではないか。

